

山下・小池コンビ第2弾

短編ドキュメンタリー映画『知産智承—鮎の海から—』

3月完成へラストスパート



左から山田武典撮影助手・一之瀬正史撮影チーフ
小池征人監督

昨年12月 岩館漁港にて

村の再生・復活をテーマに、未来を担う子供たちの総合学習の授業や、子供たちに触発されて変貌を遂げていく家族や地域を、かなり広範な内容にわたって取材した。いわば、共同体の再生・復活の条件を探る総論的作品である。今回はその各論的作品として、人々の生活史に分け入り、その地で生きる術として身につけて伝承されてきた“知恵”や“技”を通して、固有の資源が地域に何をもちたらしめるのかということに据え、世代を越えてその資源を維持・保全しつつ、知恵と技を引き継いでいくことの重要性を訴える作品とした。

総論から各論へ
文化庁の平成14年度の助成を受けて制作した記録映画「白神の夢」では、自然環境や生活環境の基本単位として考えることができる河川流域とそれに連なる海が育む固有の資源を糧に生きてきた農山漁

受け継ぐべきものとは
山下 勉（白神の映画をつくる会 代表）

総論から各論へ

村の再生・復活をテーマに、未来を担う子供たちの総合学習の授業や、子供たちに触発されて変貌を遂げていく家族や地域を、かなり広範な内容にわたって取材した。いわば、共同体の再生・復活の条件を探る総論的作品である。今回はその各論的作品として、人々の生活史に分け入り、その地で

ハタハタと地域文化

まずは北東北のハタハタが獲れる地域を取材対象にし、なぜハタハタが寄り付くのか、また、その生態はどのようなものなのか、さらには、江戸後期に北東北各地を行脚し、人々の生活や風土を絵や文で記録した菅江真澄が残した歴史資料等を基に、当時の漁村の生活状況やハタハタ漁の方法、漁具、その作り方や取り扱い方法などに付き、それらを肉体的記憶として継承してきている古老や漁師やマタギの人たちなどを取材し明らかにしたい。

また、季節ハタハタ漁に見られるように、一度に大量に獲れるハタハタを保存し利用するための方法として受け継がれてきた、魚醬（しよつる）の加工技術や、すし・糠漬け・塩漬け・干物・塩

辛などの保存方法や、それらを使った様々な料理などについてもとりあげ、北東北の人々の肉体的感性をつくりあげてきたこうした魚食文化についても多面的な取材を行い、その叢智の全貌を明らかにしたい。

知識を叢智に

通常、“チサンチショウ”といえ、地産地消」と書き、「現場で採れたものを地場で消費する」という意味で使われている。しかし私は上述の制作意図から、「その地域固有の資源を経験の相手として身につけた“知識”を、世代を超えて引き継ぎ発展させていくべき“叢智”に換えて継承していく」という意味を込めて、簡潔に“知産智承”と表現し、映画の表題とした。

この作品を通じて、失われつつあったこうした地域資源がもたらす歴史的・文化的価値がどのように育まれ、地域に何をもちたらしめてきたのかを再認識してもらうことで、地域の叢智を取り戻すきっかけにして頂き、共同体の再生・復活と新たな発展に寄与する作品としたい。

制作秘話

山下プロデューサーと小池監督が新作制作へ動き出す大きなきっかけとなったのが、小紙第3号に掲載された山本優人さんの手記「魚食伝承」である。少年時代のハタハタ漁の思い出や、部位ごとに加工・保存する母親の技術、ハタハタ尽くしの食卓風景などが活写されたこの手記は二人に強い感銘とインスピレーションを与え、漠然としていた次なる作品のテーマがこれによって決まったのである。地元人間が熱い思いを表現し、それが映画制作に繋がったことは本当に素晴らしいことだと思ふ。又、陰ながら小紙も一役買ったことを大変嬉しく思う。
(奈良 沙冬子)

No. 4

2006.2.24

編

amu

自然・人・地域文化を

編む

【企画・発行】

『白神の夢』と文化を育む会

【後援】

八森町公民館

【あ・む 編む】

- ① 糸、竹、針金、髪などを互い違いに組み合わせて、形の有る物を作る『セーターを一』。
- ② 多くの材料を集めて本を作る。編集する。『文章を一』。
- ③ 関係各方面の事情を調べて、計画を立てる。『旅行日程を一』。

ジモチー
地元人による愛と憂いのエッセイ 「地人の愛」

『潤っこ』
山本 優人

子供の頃、初夏を過ぎると仲間と連れ立って横間・滝ノ間の海岸に竹竿と芋・キユウリを

担いでアブラッコ(ヘクジメ)釣やサザエ取りに出かけた。行きがけに餌のドヤムシ(フナムシ)を確保するためケド(道)でない足場の悪い岩場を越えていく。ドヤムシは岩に近づくと四方八方に逃げ惑うため汗だくになって一匹一匹捕まえないと平らな岩場が渚に追い込むと容易に捕まえることが出来る。岩場でドヤムシを捕まえるには、素早く俊敏な移動と

逃げ方向の予測を瞬間で判断しなければならず、油断するとタンケリ(ゴム製の靴)が汗で滑って転ぶ。その心配をしながら歩くことは、大変な仕事であった。餌を確保すると、吹き出た汗の分を補給するため持参のキユウリをかじり、渴きを潤すことが出来る。仲間たちが思い思いの場所に散らばってアブラッコを釣るが、大将(先輩)は同じ漁場で何匹も釣れるけど、大きいものから釣れて小型が釣れるとその場所はまだ魚が居ないことを教えてくれる。魚の習性を知っているからに違いない。次々と海藻の茂った岩の間に糸をたらしては釣果を上げていく姿に憧れた。

昼時になると海岸に落ちていく缶詰のカラを拾って海水に芋とグンケ(貝)

やネカブを入れて即席の潮汁で空腹を満たすと満足感でいっぱいとなった。その場所は決まっていた。・の潤っこである。塩分の摂りすぎで喉が渇くと近くの湧き水を飲み、頭からかぶって

「冬に遊ぶ」工藤 兼美

毎日雪との格闘、この雪とどう付き合うか。雪中キャンプは、いかがかな。キャンプは夏の活動だと思っている方、ぜひ、一度体験していただきたい。雪の中のテント生活も意外と快適である。

雪の中での活動は、スキー、かんじきを使ってアニマルトレッキング(動物の足跡を追いかける)、冬芽の観察、雪・氷の観察、雪洞・ミニかまくら作りなど。夜、これに明かりを入れると幻想的な世界ができる。空を見上げると冬の星座が輝いている。目の前には熱々の食べ物、温かい飲み物を手に仲間と語り合えば、心も体も温かになる。こんなキャンプいかがでしょうか。白神探検隊を再開したいな～。

(くどう かねみ＝キャンプディレクター)

やネカブを入れた即席の潮汁で空腹を満たすと満足感でいっぱいとなった。その場所は決まっていた。・の潤っこである。塩分の摂りすぎで喉が渇くと近くの湧き水を飲み、頭からかぶって

海水を流した。少しばかりの収獲物のアブラッコと貝をぶら下げて自慢げに家に帰る足取りは晴れやかであり、この場所を穴場の一つとして必死に記憶に留めた。潤とは「谷あい」の水とか泉」を表すと大辞林は訳しているが、漁業界では潤は天然の入江や船着場を意味する。昔は小船で良い漁場を求めて磯場を往来し、途中休憩や水の補給の目的で小さな入江に立ち寄り、泉や湧き水を飲んで喉を潤し身体を休めることが出来る広場が必要だった。当時、海岸には数えきれないほどの泉や湧き水があり、時間をかけて大地を潤し、草木を豊かにし、人々の乾きを潤した潤水はやがて結集して海へ行き着き、最後の役割としてふるさとの海へ戻るときに、流れてきた途中の大地からの栄養素を抱えて渚に置き土産である海藻や稚魚の餌となる栄養とプランクトンを与え、母なる海へと帰る。

長老が若者へ良い泉がある潤っこを教えることで、そこから得られる恵みの豊富さを根拠に生活が始まる。人の定着には水が不可欠で良い水のあるところに人が集まり、そしてこの水は磯の海藻の栄養源となり小魚の棲みかを作り上げる素となる。人間が台地の恵みを糧に暮らす繋がり空間を問というなら、潤は海の恵みを糧に海辺に住む人の繋がりの空間を表す文字だろう。

水に関わる人の中傷の言い方に「あそこの水を飲んでるから」と揶揄する言葉があるが、おなじ泉や沢のそばで暮す者の中に頑固者が居たせいで言われる言葉である。水は一つの谷にばかり流れるのではなく気ままに大地を幾筋の小川となって潤にたどり着き、その地(潤)の伝統や習慣を形作る。何時のころからか「潤」から「間」に人が移り住むようになってから流水のごとき自由さが阻害され、人も変わってしまったのかも知れない。人の都合で分けたこの地で潤水を境に言い争う状況にはなっている。くないものだ。

身上書 ～其の4～(会員自己紹介)

山本友文(やまもと とむみ)

- 年齢＝ウド鈴木と同じ。●職業＝「合法酒」製造
- 趣味＝一匹も釣れたためしが無いフライ・フィッシング。●座右の銘＝他力本願。●夢＝クルーザー購入。(梅宮辰夫&松方弘樹的釣り生活)

私は毎日欠かさず日本酒を飲んでいる。家では「仕事」と称して飲んでいる。口からだけではなく、風呂にも酒を入れて皮膚からも吸収している。酒に含まれる良質なアミノ酸を内外から摂取しているおかげで体調はいいし、肌も年齢のわりにはツヤツヤだ。先日立ち寄った飲み屋で20代の女性と腕を捲くって肌ツヤ度を比較してみたら私の方がツルツルだった。「いやだ～、気持ち悪～い」と言われてしまった・・・。

短 信

『白神の夢』が映画専門誌『キネマ旬報』の文化映画部門ベスト10で第4位に選ばれました！

編 集 後 記

寄 付 者 御 芳 名

◇ 大高 孝雄様(峰浜村) ありがとうございます！！

『白神の夢』と文化を育む会

連絡先 〒018-2641 秋田県山本郡八森町字中浜 51-3

(F A X 兼) 0 1 8 5 - 7 7 - 2 2 2 1

奈良沙冬子 ☒ satoko-n@shirakami.or.jp